

I 京都府立医科大学創立135周年によせて



京都府立医科大学創立135周年に よせて

京都府知事 山田 啓二

京都府立医科大学が、創立135周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

また、開学以来、これまで教育、研究、診療の各分野において数々の輝かしい業績を積み重ね、我が国の医学・医療の発展に大いに貢献す

るとともに、医師を目指す若人の教育と京都府民の生命と健康を守る中核機関として、また地域医療を支える拠点病院として今日に至るまで多大な役割を果たしてこられたところであり、これもひとえに、大学当局並びに関係の皆様方の不断の御努力のたまものと深く感謝申し上げる次第でございます。

さて、御承知のように、我が国は、本格的な少子・高齢化社会を迎える中、地域医療の果たす役割が一段と高まってきています。しかしその一方で、医師の地域偏在や小児科・産婦人科などの特定診療科における医師不足が深刻化し、地域医療に携わる医師の確保が困難となるなど、地域医療自体が危機に直面している状況でもあります。

府政の基本は、何よりも府民の皆様の安心・安全の確保であり、その上に立って、誰もが明日に希望をもって暮らせる京都づくりをしていくことと考えております。

このため、京都府といたしましても、京都府立医科大学が、府民の総合的な健康管理の中核センターとして、最高水準の高度医療を提供し、府民医療・地域医療により一層貢献できるよう、外来診療棟等の新築整備を行うとともに、医師バンクを活用した医師確保対策や派遣医師の研修・研究支援、京都府立医科大学への新たな助教枠の設置、さらには地域医療機関への勤務希望者に対する奨学金等の貸与制度の創設など地域医療に従事する医師確保対策を総合的に推進しているところでございます。

現在、平成20年4月を目途に、京都府立医科大学と京都府立大学の公立大学法人化に取り組んでいるところでありますが、その目的は、京都府民に開かれた大学として透明性の高い運営を行うとともに、両大学の教育研究の特性への配慮の下で、百年を超える伝統及び実績の継承や相互の連携を図りながら、京都府における知の拠点として、質の高い教育研究を実施することにより幅広い教養、高度の専門的な知識及び高い倫理観を備えた人材を育成し、並びに大学や地域の多様な主体と協力・連携した研究成果等の活用、附属病院における全人医療の提供等を通じて、京都府民の健康増進及び福祉の向上、京都文化の発信並びに科学・産業の振興に貢献し、もって地域社会はもとより、国内外の発展に寄与することにあります。

法人化後も本学が府立の大学として引き続きその役割を十分果たしていけるよう、京都府としても全力を尽くしてまいりますので、関係の皆様方の御理解、御支援を賜りますようお願いいたします。

結びに当たり、京都府立医科大学が、その誇り高い伝統と歴史、そしてその使命感のもとに、新しい時代の医科大学としてますますの発展されますことを心から祈念いたしまして、私のあいさつとさせていただきます。



135 周年記念誌の刊行によせて

京都府立医科大学 学長 山岸 久一

本学の建学は、明治 5 年（1872 年 11 月）に京都東山の山麓にあります栗田口青蓮院の境内に、「療病院」として診療・医学教育（看護・産婆教育も含めて）・医学研究を開始して、今年で 135 年になります。そして来年（平成 20 年 4 月 1 日）から、京都府公立大学法人として 1 法人 2 大学（京都府立医科大学と京都府立大学）で、新しいカタチでスタートすることが決定しました。すなわち、独立行政法人化する前年の平成 19 年（2007 年）が創立 135 年にあたるという節目の年に、創立 135 周年記念事業を行うことに致しました。その記念事業の一つとして、“京都府立医科大学 135 周年記念誌”を編纂する運びとなりました。また、本年 8 月 25 日には京都府立医科大学関係病院等協議会第 25 回定例総会（於：ブライトンホテル）の開催に合わせて、堀場製作所の堀場雅夫最高顧問に 135 周年記念講演「じこんしょうがい自今生涯」をして頂きました。本学の創立記念日の 11 月 1 日には、旧図書館棟を残すことが決定した事を祝す意味において、旧図書館棟 3 階の講義室にて創立 135 周年記念式典を挙るとともに、記念植樹及びヴァイオリニスト鈴木理恵子氏の記念コンサート（於：京都府立医科大学図書館ホール）を行いました。また、丁度時を同じくして学園祭であるトリアス祭が行われ、学生と共に全教職員および学友会の皆様方と一緒に 135 周年記念行事を祝しました。

記念誌につきましては、“京都府立医科大学八十年史”（1955 年発刊）、“京都府立医科大学百年史”（1974 年発刊）及び“京都府立医科大学創立百二十五周年記念誌”が 1999 年栗山学長の時に発行されておりますので、その後の 10 年の歩みを記録として残し、京都府立医科大学が初めて経験する歴史的な法人化に際しての記念の意味を含む 135 周年記念誌を刊行する運びとなりました。編纂に努力して頂きました皆様に、心から敬意を表するとともに感謝致します。

本学が創立 150 周年、200 周年に向けて、日本のみでなく世界をリードする大学として発展し続けることを祈念致します。



後輩の飛躍を期待する

京都府立医科大学 附属病院長 木下 茂

京都府立医科大学は、平成 19 年 11 月 1 日に創立 135 周年を祝い、平成 20 年 4 月 1 日には 1 法人 2 大学という公立大学法人として新たな門出を迎えます。国立大学法人発足から 4 年を経て、医学部、歯学部を持つ公立大学法人としては最後の公立大学法人として発足することになります。ここには、京都府の叡智が秘められているように感じます。この変革のなかで、本学附属病院にも公立大学法人の一組織としての大きな変化がもたらされることは間違いありません。平成 20 年はじめからオーダーリングシステムが更新され、電子カルテが順次導入されます。平成 20 年夏には、附属病院新外来棟の第 1 期工事が完成し、引き続き第 2 期工事に移ります。本学関係病院の人員確保に努力する時を迎えます。これから数年間は、このような激動の時期にあります。

さて、激動の前の静けさを漂わせる 135 周年を迎えるにあたり、これからの本学に求められていることは何かと熟考すると、結局、医学・医療に熱意を持った若手人材の育成であることが明らかになってきます。数多くの良医の育成はもちろんのこと、優れた医学研究者を育てることが必要です。このためには、大学教官も、学生も、研修医も、専攻医も、そして大学院生も、皆さんが医学・医療の進歩とその恩恵への畏敬の念を持つことが必須と思われます。近代医学の発展は、細菌やウイルスの発見、そしてその克服に始まります。1890 年、北里・ベーリングによる抗毒素の発見は医学に大きく貢献し、ベーリングは第一回ノーベル医学生理学賞を受賞しました。ポーター・エーゲルマンの抗体構造の解明、ミルシュタインによるモノクローナル抗体製法の開発、そしてこれらの成果として、21 世紀はじめには抗体療法の一部が認可され、臨床で使用されるようになりました。レーザー、内視鏡、MRI などの各種テクノロジーの開発も同様に臨床の発展に大きく貢献してきました。これらは、先達の智慧と技術の結晶が我々にもたらした宝であり、我々はこのような研究と開発、そして臨床への応用に夢馳せる若人を育てる責務があります。

京都府の医療行政を担う「府立病院」、そして伝統ある「府立医大」が更に大きく発展するためには、我々先輩は、その土壌作りに日々精進し、後輩は、花咲かせるように努力する、そのようでありたいものです。京都府立医科大学の後輩諸氏の活躍を大いに期待したいと思います。



京都府立医大 135 年誌の 発刊に寄せて

学友会会長 近藤 元治
京都府立医科大学名誉教授

比叡山が見下ろすこの京都の地で、鴨川の流れと共に歩んできた京都府立医大の歴史も、今年ですでに 135 年。その間に本学は 1 万名を越える卒業生を輩出し、その半数がご存命で日本の各地に

おいて活躍しておられます。

学友会長として全国の府立医大学友会支部の集いに参加し、あるいは日本だけでなく世界の各地で学友たちが活躍しているというニュースに接しますたびに、「自分は京都府立医大の出身なのだ」「各地で府立医大の歴史と伝統を守ってくれる学友たちが頑張っている」「この伝統の灯火を消してはならない……」という思いに駆られます。

今ここに本学が新しい節目を迎えるにあたり、学友会会員一同が揃って 135 周年の記念の集いを祝うことができますのは、本学学生・卒業生にとりまして心からの喜びであり、また誇りでもあります。

顧みますと、こうして本学が教育・研究・診療の面で全国に名をなしておりますのは、もちろん現役の皆さんの日夜にわたる努力に負うところが大きですが、これまでに多くの先人たちが流された血と涙の業績があればこそ、なのです。

どうかこの府立医大の節目を祝う機会に全員が気持ちを引き締め、ますます本学が世界に向けて羽ばたきますように、OB を代表して心から希望いたします。

「青蓮会報 第 141 号（平成 19 年 7 月 31 日）」でお目にとまったかと思いますが、明治 9 年出版の「京都市分一覽図」には、本学の前身である「仮療病院」が青蓮院の一隅に描かれています。（小さくて見えませんが、是非とも学友会館にお運びいただき、是非とも実物をご確認いただきたいと思います）。それが明治 12 年の「京都府邑組分細図」では、現在の鴨川河畔に「療病院」として移転した模様が描かれております。じっ

と見つめますと、歴史の移り変わりとその重みがしひしと感じさせられます。

いま、外来診療棟の改築が本格的に始まっている様子を、鴨川の対岸から見ることができます。昔ですと建築には「槌音高く・・・」という表現がつきものでしたが、今日では「ブルドーザの音高く、クレーン車が舞い・・・」と言うことになりましょう。

鴨川に面してそびえ立つ基礎と臨床の建物が完成すれば、その威容は世間の本学に対する信頼感を更に強めるだけでなく、名実ともに京都の医療の中心となるに違いありません。

もちろんハード面だけでなく、医療の質を高め、患者の立場でものごとを考える優れた医療人を育てるというソフト面での進歩を忘れてはなりません。現在の医療は、ともすれば「病気を見て患者を診ず」という傾向にあると言われます。患者に優しい医療という本学の伝統を忘れることなく、また実際の医療に貢献する医学研究を目指して、どうぞ本学の教職員・学友会員が心を合わせ、「我が府立医大」の発展を目指そうではありませんか。

学友会は、いつも心からのエールを送り続けていますから！



135 周年記念誌の 刊行によせて

京都府立医科大学医学部看護学科同窓会
会長 中嶋 芙美江

このたび、京都府立医科大学創立 135 周年記念誌発行にあたり、看護学科同窓会長として寄稿の機会を与えられましたことは、母校が医学部看護学科として位置付けられたことによるものと大変感慨深く受け止めております。

1889 年「産婆教習所」が誕生したのが本学における看護教育の始まりとされております。以来、産婆看護婦教習所、厚生女学部、甲種看護婦学院《乙種看護婦学院（後に準看護婦学院）が開校し、2 種の教育が並行された時期もありました。1951～1957 年》、看護婦学院、看護学院、看護専門学校と多くの変遷を経ながら、日本の「看護教育」の中でも確固たる歴史を刻んでまいりました。1953 年厚生女学部の廃校によって中断していた助産師の教育が、1983 年看護専門学校の中に助産学科が設けられ再開されることになりました。

こうして、看護師及び助産師の教育が続けられる一方で、保健師の教育は、1951 年以來「京都府立保健婦専門学校」において実施されておりました。1993 年「看護専門学校」は「京都府立医科大学医療技術短期大学部」となり、3 年間の看護学科とその上に 1 年の専攻科として「助産学専攻」及び保健婦専門学校を移行した「保健学専攻」が設置されました。そして 2002 年には、同窓生及び教員の宿願が実現し「京都府立医科大学医学部看護学科」として短大から大学へと移行いたしました。4 年間の教育期間中に学生は、看護師、保健師及び助産師の国家試験受験資格を取得できます。この時点で初めて看護教育の統合が図れたわけです。

かつて 3 職種別に活動していた同窓会は、「京都医科大学医学部看護学科同窓会」として一本化されました。

こうして 118 年という長い歴史を刻んできたということは、同窓生がそれぞれの実績で大きな役割を立派に果たし続けてきたことの証明です。歴史を紡いできた一人として誇りに思うとともに、今後も進化と発展を続けつつ長くその歴史をつないでいけると信じ、期待しているものです。



記念誌に寄せて

元学長 佐野 豊
京都府立医科大学名誉教授

創立 135 年記念誌の発刊に当たり、紙面を借りて、わが国の医療の発展に貢献し、母校の輝かしい伝統を築いて下さった数多くの同窓各位に感謝し、併せて京都府立医科大学のますますの充実と発展を心から祈念します。

公立の学校は、設置者の識見や地方自治体の財政事情に直接的な影響を受け易いことで国立の学校とは異なる環境におかれている。明治以来のわが国の公立医学校・医科大学の歴史をみても、多くの学校が統廃合され、移管され、あるいは消滅している。明治 5 年の創立以来、一貫して公立の学校として歩みつづけてきたわが大学の歴史は、大学、京都府そして京都府民が一体となつてつくり上げた結晶といえる。

1950 年に母校を卒業した私は、40 年教職員として大学と歩みを共にした。そのいずれの時代にも大学の中には底流をなす二つの対立する意見があった。一つは公立大学としてより強く地域に密着し、他大学とインデペンデントであろうとする考え方であり、他の一つは地域の枠に束縛されることなく、より学際的、国際的な活動に力を注ごうとする考え方である。前者に軸足を置けば大学のアカデミズムは薄れる。後者に軸足を置けば大学は設置母体との絆を失う。

京都府立医科大学は地方色ゆたかなローカルの公立大学ではない。構成する学生は全国から集まったすぐれた資質をもつ若者である。これらの未知の力を内蔵する人たちを、いかに教育し、潜在する能力を引き出すかは大学に課せられた大きな義務である。人材の育成という点にも熱意を注ぎ、母校から広く医学界に羽ばたく後輩を輩出させてほしい。

新しい臨床外来棟の建設も進み、近く機構も法人化され、母校は未経験の時代を迎えることになる。重心をかける軸足を誤らないようバランスをとって運営され、母校が誇れる大学として存続することに期待を寄せている。



創立 135 周年にあたって

元学長 藤田 哲也
京都府立医科大学名誉教授
(現 財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター所長)

西洋医学教育の衝撃波を生んだ戊辰の役

慶応 4 年(1868、旧暦で戊辰の年) 正月 3 日、鳥羽・伏見の銃撃戦ではじまった戊辰戦争で、それまで日本人が経験したこともない多数の銃砲による傷病兵が発生した。まず、彼らが担ぎこまれたのは、現在同志社大学の建っている所にあつた薩摩藩の上屋敷と藩邸の真裏にある相国寺養源院だったが、日本古来の漢方の名医が集められても、なすすべを知らず、呻吟する傷病兵を前に焦燥感が募るばかりであつた。藩邸には藩主をはじめ西郷隆盛、大山巖などがいて、この状況の打破には西洋医学の力を借りる他はない、との結論に達した。神戸のイギリス大使館に救援を求める勅許も得て、大使館付医官のウィリアム・ウイリスを派遣してもらうことが出来た。彼は収容されていた傷病兵を手足の切断、異物の摘出など、過マンガン酸カリによる消毒、クロロフォルムによる麻酔などを使って獅子奮迅の勢いで治療し、藩主島津忠義、西郷隆盛をはじめ官軍の要人や集まっていた医師たちを仰天させた。この医師の中に、将来京都府の医療行政をリードする明石博明、東京慈恵会を設立した高木兼寛、大阪医学校の設立に力をつくした高橋正純などがいて、その後、各地で西洋医学の導入に奔走した。その結果が、官民一体となった明治の医学教育の改革だったのである。またウイリスは、薩摩藩の信頼を集め大学東校(現在の東京大学医学部)の初代校長となり、やがて明治政府の方針が明治 2 年以後ドイツ医学に傾き失職したのちは、鹿児島医学校校長に就任した。改革の衝撃波は前例を見ない速さで全国に波及し、日本の医学・医療を一変させる結果となったのだ。

本学で創案され全国に普及した「カルテ」の制度、と赤十字

明治 5 年本学創立と共にライプチヒ大学医学部教授会から正式の推薦をうけて赴任してきたウィーン生まれの医師ヨンケル・フォン・ランゲックは 44 歳の、経験をつんだドイツ系外科医で産科や眼科専門医の資格もあり、当時、ウイリス追放後ドイツ系医師を求めていた東京の明治政府もうらやましく思うほどの優れた臨床医学者であつた。彼には僅か 3 年半の在京期間しかなかったが、日本文化を幅

広くかつ深く研究し、帰国後、立派な Japanologie の著書 2 冊をライプチッヒやウィーンから出版しヨーロッパで注目を集めた文化人でもあった。彼が京都を中心に残した業績は色々あるが、本学の創立に参画したこと以外で、今に及ぶ影響を残しているのは「カルテ」と「赤十字のマーク」であろう。

最近「カルテ」の制度の歴史を調べた人が何人かあってドイツを含め世界中で病歴記録のことを「カルテ」と称している国はどこにもなく日本に特異な地方的習慣であると断じておられるのを知った。それもそのはずであって「カルテ」は本学が明治 5 年に創立されたとき、ヨンケルが定めた制度なのである。それは、『先ず当直医師は「カルテ」用紙に来院患者の氏名年齢住所職業病症などを記入し、患者にもたせ診察・料金支払い・投薬のさいに提出させ、その一切を記入する。また入院患者の「カルテ」は Kapsel に入れて病室に掛けておき病歴、投薬記録や看護記録を書き込み、処置の全体を見うるようにする』というものなのだ。この本学発の創意工夫が全国に発信され定着した結果が、現在の「カルテ」の来歴なのである。

赤十字についても謂れがある。京都市内に 2 つも赤十字病院のあるのも、本学と赤十字の深い関係を物語っている。明治 5 年栗田口青連院に京都府療病院が発足したとき、ヨンケルは赤十字の旗を掲げ、新しい西洋医学の病院の創立を印象づけた。その時（1872 年）の新聞（京都日報）に、身動きもならないくらい大勢の京都府民が詰め掛けたこの開業式のもようが線画のイラスト入りで大きく報道されている。線画に色は付いていないが、明かに赤十字の旗が翩翩と翻っている様子が描かれている。スイス人アンリ・デュナンが国際赤十字を創設したのが 1864 年で、それからやっと 8 年経ったばかりの時点である。日本が正式に加盟したのは 15 年後のことで、日本人は誰も赤十字の存在や、その意味を知らなかった時代である。

ヨンケルは、大学を卒業した年（1853 年）クリミア戦役が始まり、引き続いたイタリア統一戦争と普仏戦争に巻き込まれた。ナイチンゲールやデュナンが活躍したのも、このときであった。彼は、この戦乱の間に兵役に入り、軍医中尉に昇進していたから、当時の戦争の修羅場を経験しており、赤十字の意味を身をもって知っていた。

一方、赤十字のマークは、本学創立時に京都府の正式認可も受けていたので、引き続き附属病院（＝療病院）のシンボルマークとなっていたらしい。というのは、私が教授に任命されて間もなく、取り壊されることになった旧館病棟のゴミの中から赤十字マークが浮き彫りにされ、療病院というサインも入った使い古したランタンが二つ出てきたのだ。私は捨てられる運命にあったこのランタンを拾って図書館 2 階にある資料室に収めておいたから、興味のある方はご覧になるとよいだろう。

温故知新

本学は明治 5 年 11 月 1 日に創立された。しかし、その前史は長い。平安朝以来の漢方医学を別にして西洋医学に限定しても、亀山出身の山脇東洋がオランダの医学書に啓発され日本最初の人体解剖を行い、実証の医学を提唱したのは 1574 年であり、本学創立を遡ること 238 年も前のことであった。後世の批評家は、この東洋が出版した「蔵誌」の挿絵は完成度の低いもので、これに啓発されて 20 年後に作り出された江戸の杉田玄白の「解体新書」の解剖図に著しく劣る、という。しかし、私の解釈は違う。山脇東洋はオランダで出版された優れた解剖学の教科書を片手にもち、その図を参考に、この解剖を行ったが、その図を丸写しするのではなく、あくまで自分たちが見た所見を正直に描いたのである。その点、解体新書は違う、オランダの書物の図をそのまま転載し、その原文を忠実に翻訳したのだ。この違いは明治 9 年から 34 年まで東大医学部をリードしてきたベルツが在職 25 年の記念講演で「お雇い外人教師」について次のように言っているのと共鳴し合う。「元もと、彼らは科学の樹を育てる人であるべきでした。しかし日本人は彼らを単に科学の果実を切り売りする人のように扱ってきました。これは大きな誤りです。彼らは種を蒔き、その種から大きな樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのでした。その樹は正しく育てられれば絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにかかわらず、日本は現時点の科学の成果のみを受け取ろうとして、その成果を齎す精神を学ぼうとしなかったのは残念でなりません。」

山脇東洋もベルツも、ひたすら欧米の科学的成果のみを求めたのではなく、自らの考えから育ってきた科学を大切にし、そこから稔る果実こそ、本当の科学の成果であることを強調しているのである。創立 135 年にして、この教訓は何物にも増して重い意味を持っていると、自戒しつつ、大学の将来を思う今日この頃である。



大学創立 135 周年誌の 刊行を祝して

元学長 栗山 欣弥
京都府立医科大学名誉教授

本学が創立 135 周年を迎えるに当たり記念誌を
発刊するのご連絡を頂き、大変うれしく存じま
すと共に、この企画に関係される皆様に心から敬
意と謝意を表する次第です。

長い歴史と伝統を誇る本学では、その各節目に
記念の式典や記念誌の刊行が行われて来ました。

私の記憶しているだけでも、私の入学の少し前に行われた創立 80 周年、その後の
創立 100 周年及び 125 周年と 3 回に及んで居ります。これらの中でも私にとって特
に印象深いのは、創立 125 周年の記念行事及び記念誌の刊行であります。当時私は
現役の学長でありましたので、記念行事の立案と企画、記念募金のお願い、記念誌
の刊行、記念式典の挙行などを担当し、多忙な日々を経験致しました。またこの間
に多くの方々、特に学友会や本学関係者の皆様から暖かいご支援とご協力を得て
何とか大役を果たすことが出来た訳で、今尚感謝の気持ちと共に当時を懐かしく思
い出して居ります。恐らく今回の創立 135 年誌の刊行を担当されている皆様も同
様な経験をされる事と存じ、ご苦労様と申し上げると共に、ご成功をお祈り申し上
げます。

本学の歴史と伝統を守り、次々と訪れる創立 150 周年、175 周年、200 周年など
の歩みの記録と共に、本学の将来像を如何に設定し、如何にこれを実現して行くか
の討議やその記録も、これらの記念行事の一面として考慮すべき重要な課題ではな
いかと思います。不確定の要素が多く、テンポの速いこの時代の中でこの様な問題
を考える事自体大変だとは思いますが、この機会に是非後輩の皆様を中心に考え、
討議し、立案して、我が京都府立医科大学の将来像、特に何に特徴を持つ、どの様
な医師や医学者を、またどの様な看護師やその教育者を、どの様に育ててゆくのか、
世界に通じる研究者を如何に育て、また世界に認められる研究成果を如何に世に問
うてゆくのか、などについて考えて頂ければと期待しております。この創立 135 周
年が、本学の更なる発展を遂げるスタート・ラインとなるよい年となりますように
と念じて居ります。



大学創立 135 年誌の発刊によせて

前学長 井端 泰彦
京都府特別参与
京都府保健環境研究所長
京都府立医科大学名誉教授

平成 9 年（1997 年）11 月 2 日、国立京都国際会館において、荒巻禎一京都府知事ほか多数の来賓、学友会員、教職員、学生などの出席のもとに大学創立 125 周年記念式典、祝典が盛大に挙行された。記念講演として、1973 年ノーベル物理賞受賞者で筑波大学学長江崎玲於奈先生に“一物理学者が歩んだ五十年の道”としてお話をいただいた。私はこの式典の式典委員長を勤めさせていただいた。

また、創立 125 周年京都新聞特別号“新時代の医学・医療を開く”のなかで座談会“世界トップ級の医学心のこもる医療がモットー”の司会も勤めさせていただいた。

創立 125 周年記念事業の目玉として、吉田幸雄学友会長の実行委員長のもと、多くの学友及びその他からの寄付金により青蓮会館の新築が行われ、平成 14 年（2002 年）10 月 14 日無事竣工記念式典が行われた。

十年ひと昔と言うが、平成 9 年から 19 年の 10 年間に医学科では実に 30 名の新しい教授が生まれている。私はこの激動の 10 年の間に、平成 12 年 4 月より 2 期 6 年学長を勤め平成 18 年 3 月末に退任させていただいた。その間の主な出来事について以下に振りかえって見たい。

まず、栗山欣也学長時代から懸案であった内科学、外科学教室のデイビジョン化、基礎、社会医学教室のあり方及び教授選考規程の改正、附属病院のオーダーリングシステムの導入、栗山学長からの引継ぎ事項として医学部看護学科の設置（平成 14 年 4 月）、附属病院外来診療棟整備構想策定（平成 15 年 3 月）、大学院重点化（平成 15 年 4 月）ゲノム医科学部門設置、その後、臨床病理学、臨床分子病態検査医学、血液腫瘍内科学に新しい教授が誕生した。平成 15 年 4 月にはリエゾンオフィ

スの設置と共に9月には第一回産学公連携フォーラムが開催された。東洋医学を始めとして五つの寄附講座の誕生、同志社大学、立命館大学、京都薬科大学と学術交流包括協定締結、オクラホマ州立大学との国際交流復活なども心に残る出来事である。その他、機器整備などについては、バイオインフォマクス、トランスレーショナルリサーチのための研究機器整備を行い、プロジェクト研究員、病院教授制度などを導入したが、大学構成員の人たちの絶大な協力のもとにいろいろの事が出来たと感謝している。

私の学長の中に記念式典としては、附属脳血管系老化研究センター開設 10 周年（平成 13 年 3 月）、医療センター開設 30 周年記念式典（平成 13 年 11 月）が開催されている。

全国的な出来事としては、平成 16 年度より研修医必須化、医学教育も変革期を迎え、医療制度、医療保険制度も変わろうとしている。

私は大学の使命は教育、研究を通じての人材育成が第一義であり、本学はその上に医学・医療を通じて京都府民の健康と生命を守る使命がある。医学・看護学教育においては、知識、技術の修得の上に医師、看護師としての使命感、倫理観など人間教育が必須と考える。

本学は来年（平成 20 年）4 月より独立法人として出発するが、大学構成員が一丸となり、緊張感を保ちながら、真摯な議論を展開し、創立 150 年に向かって発展していただきたいと切に願っている。